この世はつらいよ

正井健史

沈む間際の太陽の悪あがきが、閑静な住宅街を物悲しく朱色に染めていく。

まるで僕の心を表しているみたいだ。今日だけでもう百人近くの人間に声をかけているのに、全然豆腐を食べてくれない。僕の生まれた二百年くらい前なら、皆けっこう食べてくれたのに。

ため息を漏らしながら、あてもなく住宅街を歩きまわる。僕はどうも歓楽街は好きになれないし、歓楽街にいる人間達にはなかなか僕の姿が見えない。それに比べるとこの辺りは天国だ。子どもが多いし、ぼんやりしている人間も多い。まあ、全然豆腐食べてくれないけど。

下駄を鳴らしながら歩いていると、手に持っているお盆の上の豆腐が歩調に合わせてふるえる。こんなにおいしそうなのに、なんで食べてくれないんだろう。

やっぱり僕の格好がいけないのかな。立ち止まって、自分の着物を見てみる。浅黄色の質素な薄い生地、あまりおしゃれじゃない。それにかぶっている笠もいけない。今時笠をかぶっているのなんて僕くらいだ。

やっぱり帽子くらい欲しいなぁ。そう考えて、またため息が一つ出た。僕は帽子も洋服も着られないようにできているのに、なにをくだらないことを考えているんだ。それより、はやく人間に豆腐を食べさせなきゃ。もう何年も食べさせてないんだから。

決意新たに歩きだそうとすると、前方から大小二つの人影が見えた。小さい影はランドセルを背負っていて、大きな影と手をつないでいる。

近づいてみると、どうやら人間の親子らしい。お母さんもいるのか……、子どもだけの方がいいんだけどな。とはいえ、ちいさい子どもがお母さんと楽しげに話しながら斜陽の中を歩いているのは、なんとも微笑ましい。さっそく声をかけよう。

「ねえ、豆腐食べない？」

親子との距離が近づいた時に、満面の笑みを浮かべて子どもの方に話しかける。どうせ母親に声をかけても相手にされないか、僕の姿が見えない可能性が高い。その点、子どもは好奇心の塊だから僕の言葉に耳を傾けてくれることが多い。

「僕はね、豆腐小僧って言うんだ。お金は取らないし、とってもおいしいんだよ」

親子が足を止めたのを見て、たたみかけるように言葉を続ける。足を止めたということは、僕が見えているはずだ。さあ、食え。

「僕、お豆腐嫌い。味しないし、おいしくないんだもん」

子どもは顔をしかめ、首を振りながら言った。

「僕の豆腐は格別だって、本当においしいんだから一口食べてよ」

「でも……、お母さん」

子どもが母親の方を見ると、厳しい顔で首を振って、ダメよ、と短く言い放った。

「いいから、食べてみてよ。お願いだからさ」
道をふさぐように親子のまん前に立って、豆腐ののったお盆を差しだす。差しだした時の勢いで、豆腐が大きく揺らめく。それでも形は崩れない。弾力のあるいい豆腐だ。
しかし母親はそんな豆腐に見向きもせず、子どもも手を引いて道の端を通って行ってしまった。
「あんな、気味の悪い子とお話したらダメでしょ」
遠くから母親のきつい声が聞こえてくる。
「でも、ちょっとだけおいしそうだったよ」
「あんなもの、食べていいわけないでしょ、なにが入っているかわからないんだから。お豆腐が食べたいんなら、ママがいつものスーパーで買ってきてあげるわよ」
「うん……」
段々語気が強くなる母親に、子どもは力なくうなずくしかできなかった。
僕は自分が妖怪であることを少し後悔した。さっきの光景はあまり見ていて気持ちのいいものじゃない。人間なら、あれだけ離れたら見えないし聞こえなかっただろうし。
豆腐を食べてもらえないのには慣れたけど、僕と話をしただけで子どもが怒られるのはいつ見ても辛い。
「へたくそだな、あんなやり方じゃ百年経っても人間に豆腐食わすのは無理だぞ」
急に後ろから、しゃがれた声が聞こえてきた。後ろを振り返ると、斜陽を背負った薄汚い爺さんが突っ立っている。小枝のようにやせ細ったからだに、ぼろ雑巾のような気流しを纏い、足には生まれた時から履き続けているに違いない、激しく傷んだわらじを履いている。
この見ているだけで不幸になりそうな青白い顔と、陰鬱な雰囲気には覚えがある。
「あんた、もしかして貧乏神かい？」
「うむ、まさしく我こそは貧乏神よ」
貧乏神は、僕の問いに偉そうに答えたけど威厳のかけらもない。
「あんたにはあんまり会いたくはないけど、久しぶりに妖怪の仲間に会ったよ。こんな住宅街じゃなかなか見かけないから」
僕は親しみをこめて言ったつもりだったけど、貧乏神は嫌そうな顔をして、苦々しく口を開いた。
「わしは妖怪じゃあない。神様だ、間違えるなよザコ妖怪の分際で」
「お前なんてほとんど妖怪じゃないか。それに、僕はザコ妖怪なんかじゃない」
浮浪者みたいな格好しているくせに、生意気だ。これだから、あまり会いたくないんだ。
「お主などは豆腐をくばるだけの、郵便配達みたいな妖怪だろうに。お主にできるのはせいぜい豆腐を食べた人間に、カビをはやす程度よな。まあ、それも人間が豆腐を食べてくれないと、どうしようもないわな」
貧乏神は頭にくることを、嫌みたっぷりに言う。やっぱり貧乏神

なんかと関わると、妖怪の僕でさえいい事ない。ここのところ、ため息が増えているのに、今日は一段と多くなりそうだ。そう思ったとたん、また一つため息が口から漏れ出した。
「ため息をつくと、幸せが逃げるぞ」
「誰のせいだと思っているんだよ」
この爺さんには本当にいらいらさせられる。さすがは貧乏神って感じだ。
「僕はあんたに会う前から幸せではなかったけど、あんたのおかげで余計不幸せな気分になったよ。さすがは貧乏神。さぞかし多くの人間を不幸にしてきたんだろうね」
嫌み半分、妬み半分。僕は豆腐小僧としての役目をほとんどはたせていない、でも貧乏神はちゃんと人を不幸にできているんだろうな、羨ましい。
しかし、貧乏神は僕の言葉を聞くと、少し悲しそうな、そして情けなさそうな表情をして首を振った。
「わしの力をもってしても最近はまるでダメだなぁ。まったく不幸にできやしない」
「そんなことないだろう。僕だってたまに捨てられた新聞なんか読むけど、今は不景気なんでしょ？　不幸な人間であふれているんじゃないの」
それに最近は、下を向いて歩いている人間をよく見る。僕みたいな悪戯を生業とする妖怪としては、元気のない奴に悪戯しても面白くない。死人に鞭打つような行為は好きじゃないし。
「あれは、わし達は関係ないよ。経済だとか政治だとかはわし達の管轄外だよ。知ったこっちゃないね」
貧乏神は、俺はインテリじゃないんでね、と言って陰気な笑い声をあげた。
「じゃあ、なんで不幸な人間が増えているのさ」
「人間どもが勝手に不幸になっているだけよ。人間どもは自分に有益なものと、そうじゃないものの区別が苦手だからな。おかげで、わし達は商売あがったりだ」
吐き捨てるように文句を言う貧乏神をみていると悲しい気分になる。まさか、大忙しだと思っていた貧乏神まで不況だなんて。あんなにイライラさせられた相手だが、慰めてあげたくなってきた。
「でも、不幸な人が増えるのはあんたらにとっては、喜ばしいことでしょ？」
慰めたつもりが、貧乏神はより不機嫌そうな顔になって怒気をふくんだ口調で言った。
「見損なうなよ。人間なんかの起こした不幸で喜ぶほど、わしは落ちぶれてはおらんわ。わしが人を不幸にするからいいのだ。それなのに最近の人間は勝手に不幸になりやがる」
救いようがないよ、と言うように貧乏神は両手をあげて降参のポーズをとった。
「それに最初から不幸な家にとりついても仕方がないだろう。わし達貧乏神の楽しみは、なんであの人が不幸になるのだ、というような善良な一般市民を不幸のどん底に叩き落とすことにあるのだから

な」
　胸を張って偉そうに言ってはいるけど、内容は外道だなぁ。いや、貧乏神としては正しいあり方なのかも。ここまで自信満々にいわれると、逆にすがすがしい。
「しかし、貧乏神でさえ不景気なようじゃ、妖怪全員不景気なのかな」
「いや、わしの聞いたところによると、死に神は大忙しらしいな。疫病神めは、最近の医療の発達を嘆いていたが。あとは狐狸カワウソ、狢など人に化けられる妖怪は人間にまぎれてなかなかの暮らしをしていると風のうわさで聞くな」
「そんな情報どこでつかむの？　僕はなかなか妖怪にあわないけど」
　僕の質問に貧乏神は口元をゆがませ、嫌みたらしく答えた。
「わしは人の家に入りこむことが多々ある。俺が気にいるような立派な家に住んでいる輩の多くは狐狸の類よ。いまや、人間の創造物を狐狸が利用する時代なのだ。それは、裕福でまっとうな人間を見つけるのは苦労するわな」
　貧乏神は薄気味の悪い笑い声をたてているが、どこか悲しげだ。それも、そうだよ、裕福な人間が減るってことは貧乏神の住みづらい世の中になってきているってことだもの。
「妖怪にはつらい世界になったね。まさか貧乏神まで住みにくいとは思わなかったよ」
「まあな、よく田舎でしか暮らせぬ自然派の妖怪共が、俺達みたいに人の輪のなかでくらせる連中をうらやましがるが、どこも一緒よ。どこにいても、この世にいるかぎり生きづらいもんだ」
　貧乏神は諦め顔で言って、深いため息をついた。僕もついつられてため息が漏れる。
「なんで人間は自分も妖怪も住みにくい世界を作るんだろう。僕はまだ二百年くらいしかこの世にいないから、よくわからないや」
「わしだって詳しくわからんよ。わしなんかは千年近く人間を不幸にし続けてきたがね、まだ人間は理解不能だ」
　また貧乏神がため息をついた。今度はつられないように歯をくいしばって耐えた。
「やつらの行動理念は飽くなき破壊と、飽くなき創造だ。自分も、自分以外の生物も全てを不幸にしていく。これは、けして満足しない欲を抱えて生まれた人間という種族の性なのかもわからんね。わしなんかより人間のほうがよっぽど貧乏神さね」
　貧乏神の悲しい自虐的な笑い声が、人影のなくなった住宅街に響き渡る。この笑い声を聞ける人間は今存在しているんだろうか。
「でも、僕ら妖怪は人間を見捨てていないよね。僕はあまり会わないけど、山にも川にも海にも、もちろん人の中にだって妖怪いるんだから」
「うん、人間の急成長はもろ刃の剣ではあるけど、尊敬に値するからな。それにやつらの得意技は成長と変化だ。いつかは自分達の性すら克服するような成長と変化をとげるかもしれん。それが幸か不幸かは分からんがね」

さすがは腐っても神で、僕の五倍近い年月をこの世で過ごしただけはあって、含蓄のある言葉だ。僕は二百年生きているが、やはり上には上がいるものだ。

会話が一段落ついた時、横をサラリーマン風の男が怪訝そうな顔をして通りすぎて行った。もう暗くなり始めているのに、やけにはっきり見える男だった。

「ありゃあ、カワウソだな。狐は多いけどこの住宅街にはカワウソもいたのかい」

貧乏神が感心したように呟く。

「カワウソは頭がいいね。特にニホンカワウソは早々に見切りをつけて、人間社会にとけこんだのだもの。狐狸が人間社会に本格的に潜入する五年くらい前かね」

「へえ、そんなにはやくに」

僕は感嘆の声をあげた。貧乏神が言うには、ニホンカワウソはもう人間社会にとけこんで三十年近く経つらしい。

「人間に化ける、か」

僕は視線を落として、お盆の上の豆腐を見た。真っ赤なもみじをのせた、真っ白な豆腐。これを人に食べさせて二百年になる

「お前が人間に化けたい気持ちはよくわかる。わしはあいつらを散々に言ってきたが、やつらは自由だからな。変化と自由の権化だ。俺達はその真逆。何百年、何千年経っても変わらない。変わらず、死なず、ずっとそこにあるモノ。それが俺達だ。対極にあるもの同士は憧れあうものさね」

貧乏神は、僕の顔を見て何かを悟ったように言った。

「変わらずに、そこにあるモノ……」

「そう、だから俺達は人間がどんなに無茶してもこの世に残り続ける義務がある。俺はそう考えるし、それが俺のプライドだ。人間よ、驕るなかれ。俺達人外の異形は、常にお前たちを見張っているぞ、とな」

妖怪としても誇りか。僕は持てているのかな。昔は持っていた、今はどうなんだろう。それに時代は変わったのに、誇りは変わらなくていいのかな。今までと同じで本当にいいのかな。首をひねる僕を見て、貧乏神はゆっくりと後ろを向いた。

「では、俺はそろそろ行くぞ。老人の長話につき合ってくれてありがとうよ。今まで話したのはわしの話だ。お主はまだ二百年ぽっちしか生きておらんのだから、いろいろ悩めばいいさ。まあ、わしは今日も宿なしだろうがな」

貧乏神は小さなため息をついた後に、僕には不気味にしか聞こえない笑い声をあげて、まだ薄い闇の中に消えて行った。

僕は一人になって、もう一度自分の豆腐を眺めてみた。もう二百年の付き合いになる、見飽きた白い相棒。

これを置いてみようかな、心の奥のいたずら心とも好奇心ともつかない、謎の感情がふと込み上げてきた。僕が闇から生まれて二百年、ずっと持ち続けてきた、僕が僕である証。僕が妖怪である証明書。誰に教えられたわけでもないけど、豆腐を置くことは豆腐小僧にとって最大の禁忌であることを僕は知っている。

これを置くことは人間の自殺と同じくらい罪深くて、自分の存在意義を破棄するようなものだ。それでも僕は変わりたい。貧乏神は変わらないことこそが、妖怪のプライドだと言っていたけど、僕はそんなのは古いと思う。もう江戸時代も明治時代も終わったんだ、平成を生きる妖怪は変化しなくちゃやっていけない。なにより、もう誰にも豆腐を食べてもらえない、酷い時は僕を見つけてさえくれない生活はもう嫌だ。僕のせいで、子共が怒られるのを聞くのも嫌だ。

僕はそっと豆腐の乗ったお盆を地面に……。

「やめておいたほうがいいと思いますよ」

豆腐の乗ったお盆を持ったまま腰をかがめた僕の耳に若い男性の声が聞こえてきた。

体を起して声のした方向を見てみると、さっきすれ違ったサラリーマン風の男だった。声のわりに年を取っているのか、苦労しているのか、髪に白いものが混じっているし油っけもない。よくみると目の下に隈まである。僕が観察しているとサラリーマン風の男が口を開いた。

「君は、豆腐小僧ですか？　私も妖怪に詳しいわけじゃありませんけれど豆腐を持っている妖怪は豆腐小僧くらいしか思い浮かびませんし。警戒しないでください、分かっているかもしれないけど僕も妖怪、カワウソなんです」

「なんで、止めたの？」

僕は頭を掻きながら笑みを浮かべるカワウソを睨みながら尋ねた。こいつが止めなければ僕は人間になれたかも知れないのに。

「たいていの人間は自殺しようとしている人間をみたら止めますよ。それと同じです。さっきは久しぶりにあった妖怪が貧乏神だったせいでつい素通りしちゃいましたけど、やっぱり気になって帰って来てみてよかったですよ」

「余計なお世話だよ。あんたみたいに変化できない妖怪の僕は、自殺まがいのことでもしないと変われないんだ」

睨んだまま言うとカワウソは困ったような顔をして、また頭を掻いた。

「君は変化できないかも知れません。しかし君は悠久の時を生きているじゃないですか。僕のような獣であり妖怪でもあるモノは、普通の生き物よりは長生きですが永遠ではありませんから」

「悠久なんて、いらないよ。そんなものより、僕は変化が欲しいんだよ。毎日毎日、食べても貰えない豆腐を持って歩きまわるだけの人生なんてもう飽きたよ。これなら期限のある人間のがマシだ」

やっぱり僕はあの貧乏神みたいに、変わらないことがプライドだなんて達観できない。

「私だって毎日毎日同じことの繰り返しですよ。いくら人間が進歩する生き物とはいえ、毎日違うことが起きていたら大変です」

カワウソはにこやかに言った後、一旦間を空けて真顔になって口を開いた。

「私達ニホンカワウソは、好きで人間に化けているわけではありませんよ。苦渋の決断だったんですよ。私達は妖怪として生まれたわ

けじゃありません。カワウソとして生まれ、運のいい一握りのカワウソが後天的に妖怪になるんです」
　カワウソは言葉を切って、目を細めて空を見上げた。そして強く瞬きをしてから、また僕の方を見て話を再開した。
「今から三十年以上前から、この日本で僕達はもう暮らせなくなってきていました。もう諦めて静かに全滅しようという意見もありました。しかし、ニホンカワウソという種を守るために、私のような妖怪になれた運のいい者だけが断腸の思いで仲間を見捨てて、こうして生き延びているんです。けして、今までの生活に飽きたから人間に化けているのではありません。おそらく、狸さんや狐さんも同じような事情をお持ちのはずです」
　カワウソの話し終わった時の潤んだ瞳をみて、僕は自分の愚かさを知った。でも、僕だって苦しんでないわけじゃない。
「僕にはあなたの気持は分かんない。僕は基本的に群れて暮らさないから、仲間を失う経験もない。でも、あなただって僕の気持わからないでしょ。二百年もずっとさまようだけの生活。天狗みたいに人のいない場所に定住できるわけでもなく、あなた達みたいに人間の中に完璧に入り込めるわけでもない、中途半端な妖怪の気持ちなんて」
　それに貧乏神みたいに達観もできない。
「わかりませんよ。わかるわけが有りません。しかし、君の取ろうとしている行動が正しくないのはわかります。君は最近の住みにくい現世のせいで、軽い鬱になっているだけですよ。私も人間に化けてから数年が経つと同じような気持ちになりましたから」
「それでも、僕は、変わりたいんだ。絶対変わるんだ」
　僕は目を瞑り、両手で持っていたお盆を振り上げて、思い切り地面に叩きつけた。カワウソの止める声と同時に木とコンクリートが衝突してけたたましい音を辺りに響かせた。
　カワウソの息をのむ音を聞きながら目を開くと、僕の足元には見慣れたお盆が転がっていた。もう見飽きた筈のお盆でも、コンクリートの上に有るだけでとても新鮮だ。そんなことより、豆腐が見当たらない。僕は衝撃で飛び散ったのかもしれないと周りを見渡したけど、一かけらも見当たらない。
　もしかしたら、消えたのかもしれない。あれは、僕の手から離れると自然と消えるようになっているのかも。つまり、僕はもう妖怪じゃなくなったのかな。僕は試しに、下駄を脱いでみようとした。でもどんなに下駄のかかとの方を地面に叩きつけも下駄が脱げない。何度も何度も下駄で地面を叩いていると、小さな声でカワウソが声をかけてきた。
「豆腐小僧さん、頭」
　頭？　なんだろう。頭に手を伸ばしてみると、笠の前の方にひんやりとした物がある。これってもしかして。
　それを手で握って、目の前に持ってくると、案の定それは豆腐だった。目を瞑る前と全く同じ憎たらしいほど真っ白な豆腐。
　僕が豆腐を見て唖然としていると、カワウソはダムが崩壊したような勢いで笑い声をあげた。

「お、お盆をふ、ふり上げた時から、豆腐は頭の上でしたよ」
カワウソは僕に背を向けて笑い声を殺しながら言った。そんな早い段階で頭の上にあったのなら教えてくれたらよかったのに。僕は顔が赤くなるのを感じた。
「でもですね」
ようやく笑いを殺しきれたのか、目じりを拭いながらカワウソが口を開いた。
「君があんなに激しく動いても、豆腐は君にぴったりよりそって落ちなかったんですよ。そんなことは普通あり得ません」
僕は片手に豆腐を乗せて、お盆を拾った。拾ったお盆があまりにも手に馴染んで、僕は不覚にも泣きそうになった。
「無くしてはじめて大切なことに気付くこともあります。そうならなくてよかったですね」
ゆっくり豆腐をお盆に戻している僕にカワウソが優しく言った。カワウソが言ったことが身にしみて、僕の視界の下にお盆に乗った豆腐のある光景が見えるのがあんまりしっくりくるせいで、僕はまた目頭の熱くなるのを感じた。
街が本格的に闇に包まれだしてきた頃に、僕はカワウソと別れて一人佇んでいた。今日は珍しく色んなことがあった。色んな事を考えたな。一度は妖怪に嫌気がさして人間になろうとした。でも、やっぱり妖怪なんだと再確認した。だから僕は今まで通り変わらず、でもいろんなことを考えながらこの世に有り続けよう。どんなに暮らしづらい世の中でも。人間ごときに妖怪は屈しない。見続けよう、人間が滅びるまで。それが僕の、人間の営みの中で暮らす化け物達のあり様だ。とはいえ、貧乏神のように何も変わらないのが妖怪の誇りだなんて思わない。だって僕は今日変わったもの。妖怪のままでも考えることすれば、姿形は変わらず有り続けられて、しかも内部は変えられるんだ。
僕は、またあてもない放浪を始めた。歩くたびに下駄の音が鳴り、両手でもったお盆の上では、豆腐が歩調にあわせて楽しげに踊っていた。

終

後書き

初めまして、正井健史と申します。この作品は、二〇一一年のダイヤモンドフェスティバルの時に発行した冊子に掲載した作品です。最近になって見直してみると、やはり拙さが目立ちますが少しでも楽しんで頂けると光栄です。